

無事、平壤から引揚げ、生まれ故郷の熊本県に立寄る。のち、御主人の岩岡氏の生誕の地山形県に引き揚げて落ち着き、兩人とも山形県教職に任用となり、岩岡武雄氏は村山市の中学校長となり、僻地教育振興に名を馳せ、キミコ夫人は教職を退職したのち、山形県食生活改善推進協議会の会長を長期にわたり勤め、県内学校、都市と農村の団体、企業職場などに広く食生活改善に大いなる功績をあげた功労者である。

よって、山形県知事から感謝状並びに厚生大臣から表彰状をそれぞれ受章している七十九歳のいまだに現職をもつ老女である。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 引揚げ体験記

広島県 藤原 千鶴子

私は、大正十二年十一月九日、富山県に生まれました。神経痛の持病のあった父は(長谷勇蔵)治療のため、近くに温泉のある松倉小学校坪野分教場に住み込みの教員でした。

昭和三年、招かれて朝鮮に一家で移り住みました。慶尚南道の鎮海ちんかいという海軍要港のある、放射状の整然とした美しい町並みで、桜で有名な名所でした。父は鎮海を振り出しに蔚山うりさん、河東と転任し、河東小学校の校長で終戦になりました。

私は鎮海高等女学校を出て教員の道を進み、昭和十九年の三月まで河東の朝鮮人小学校に勤めていましたが、教員である今の夫と結婚し退職しました。ちょうど、終戦の一年前で生活は大変窮屈になっていましたが、それでも教員という役職柄、大変恵まれた点もあ

りました。

朝鮮では一番が警察官、二番が教員と言われ幅を利かせておりましたが、これは表面だけのことで決して心から追隨してはいなかったことが、分かるのに時間ばかりませんでした。

主人は河東かとうの朝鮮人学校の教員でしたが、召集にっぐ召集で、結婚適齢期の日本人男性はいなくなり、本籍が広島県とあまりにも遠く離れた所でしたが、後のことを考えるゆとりもなく結婚しました。既に衣料品は切符制になっていましたが、家中の切符を集めて、それでも私には過ぎた支度を母がしてくれました。その上せめて箆笥の一棹でもと、朝鮮人の職人に頼んで作ってもらい、戦時中としてはまあまあ嫁入り支度をしてもらい、新生活が始まりました。しかし、この母の心尽くしの着物も終戦後、ほとんど手を通すことなく盗まれてしまったのです。

甘い新婚生活など夢のまた夢で、毎日、青年訓練所の指導員としてゲートル巻いて、何も知らない青年たちの心を戦争に向けて、かり立てていたので。確実

に敗戦に向かつて日本は動いていたというのに……。

教職にある者は、召集は最後まで免除される状況でしたが、二十年に入って次々と召集の話が聞かれるようになり、主人にもついに、赤紙（召集）がきたのです。六月二十九日、終戦まで二カ月足らずの日でした。全校生徒がバス停に送りに出してくれました。その一番端に並んだ私は泣いてはいけない、出征兵士の妻は絶対涙を見せてはいけない、と言われておりましたが、どうしてもこらえることができなくて下を向いて泣きました。主人が私の前に立って、無言で大きな手で万感の思いを込めて頭を押さえました。あの時の胸中を思うと今でも鼻の奥がじんとしてきます。

主人が出征してからの二、三日は全く何も手に付かず、虚脱感におそわれていました。初めて軍事郵便が届き、戦地には出ていないことが分かり、申し訳ないが安心しました。大邱だいきゅうの八十連隊に配属になり、新兵の教育係をしておりました。

運命の八月十五日、重大な放送があるというので、正午前からラジオの前に座って待っていました。何

か雑音が入り、よく分かりませんでした。とぎれとぎれに玉音が聞こえ、戦争が終わったということがわかりました。負けたのです。夢にも思わなかった敗戦の二文字、勝つまではほしがりませんと、窮屈な生活に耐えてきたあれは何だったのでしょうか。訳もなく涙がほほを伝わりました。でも、いつかまた主人が帰ってくる、再会の日が訪れると言う安堵感でいっぱいになりました。

当時、私の両親は町から一キロほどはなれた日本人学校の校長宅におりました。私たちの家は正反対の山の一番上にあり、桃の果樹園を経営しておられる農家の隣にありました。主人の出征した後、その赤ちゃんのお守りをしてあげていました。しかし、平穩な日は長く続きませんでした。

忘れもしない終戦の日から四日目のこと、この日は朝から何となく不穩な空気が流れていました。父の学校の同僚の先生が、昼すぎに私の家へきて、「奥さん今晩とんでもないことが起きるから、覚悟しておいた方がよい」と言われました。そのとき、私は何の疑い

も持たず、この先生はふだん思想的に要注意の方と父に聞いていたので、何を言っても歩いていくのかと軽く聞き流しておりました。

ところが、夜になって真つ暗な闇を通して、突然パンパンという銃声が響きました。昼間わざわざ言ってきたのは、このことだったのか、それにしてもなぜ、あの先生が、このことを事前に知っておられたのか、私には考える余裕もなく、不安になってお隣の家に逃げ込みました。どこから聞こえるのか分からず、すり鉢の底にあるような町には、無気味に銃声がこだましていました。お隣のおじさんは家の中には危ないから、裏の桃畑に行こうと言って蚊帳を持ち皆を連れ出しました。お隣の家族五人と私と六人で肩を寄せ合って、蚊帳の中でひっそりと息を殺していました。何時間立ったでしょうか、銃声は相変わらず響いています。真つ暗だった畑の中が、月の光に照らされて明るくなっていました。

当時、私は八月末の出産予定をひかえ大きなお腹をかかえて、いつ産気づくか分かりませんので、小さな

リュックサックに産着とおむつ少々と、消毒用のクレゾール一本、脱脂綿など最小限の出産用品を詰めて、肌身はなさず持つていました。銃声は相変わらず聞こえていましたが、その中を日本人の警防団の方が三人こられました。個々に家には危険だからと町全体で五百人足らずの日本人が、その晩は警察署に集結することになったと言って、守って連れて行ってくださいました。警防団の人が手分けをして、三三五日本人を見付けて拾って歩いてくださったのです。

警察の広場に着くと、私はすぐ両親を探しましたが、まだ到着しておりませんでした。その間にも統統と日本人が集まってきましたが、ついに両親はきませんでした。時間がたつにつれて不安は募るばかりでした。小学校の周りに数軒あった日本人だけが見えません。いろいろ話し合った結果、どこかに拉致されたのではないかということになったのです。では、どこに……、考えられるのは町にくる途中にある朝鮮人学校ではないかということになり、在郷軍人の方が三人学校まで見に行かれました。日本刀を抜いて「日本人はいないか」と

言って入って行ったところ、一つの教室に軟禁されていました。

後で父に聞いた話では、警察へくる途中、校門の前で、かつては同僚だった朝鮮人の先生が、「今、町へ行ったら暴動が起きていて、大変なことになるから」と言って教室へ連れて行かれたと言うことでした。中には別に暴力を振るわれることもなく、割合冷静だったようですが、この救出が間一髪遅れていて、もしもつと時間がかかっていたらどんな犠牲が払われたか分りません。助けられた後、何の疑いももたず入った人たちも、皆恐ろしさに足がふるえたとおられました。この先生が反日感情を持つておられたのは、主人がよく話しておりました。先導した先生はそのまま警察へ連れて行かれ、青白い光の下の土まんじゅうの中で落命されました。家族の方がこの報を聞かれたら、どんな気持ちだろうかと思うと、かつての同僚に對して胸が痛みました。

結局、郡部の駐在所の銃を押収して、日本人を威嚇してきたとのことでした。今まで押さえつけられてい

た感情が、一度に爆発したのでしよう。その晩はまんじりともしませんでした。これでもうこの地にとどまることは不可能、と言う結論が出ました。

その結果、明朝一人二個までの手荷物をまとめて、午前十時までに再びここに集まるようにと言うことで、午前七時に解散になり、家へ帰って見て啞然としました。家の中は何一つ残っていませんでした。一晚かかってありつたけの家のものが、皆運び出されていきました。驚いたことに、前夜のおかずの残りの入った小皿一枚までなくなっていました。家の中を新聞紙が無情に舞っていました。涙も出ませんでした。結局、私の手元に残ったのはリュックサック一つで、これが全財産だったのです。あわれさに母が流していた涙が印象的でした。

警察に行くと、泗川しせんに駐屯ちゆんしていた中隊のトラックが何台かきておりました。そのトラックに町中の人々が分乗して、それぞれの思いを残しながら、ひとまず、河東を脱出したのです。臨月だった私はトラックに乗るのは無理だと言うので、指揮に当たっておられた中

隊長の自動車に乗せていただきました。後で聞いた話ですが、私の弟と中隊長の弟さんが、京城師範で友達だったとのことで、人の世のめぐり合わせといましようか、不思議な因縁を感じ心から感謝しました。

悪夢のような昨夜からの出来事を思い浮かべながら、一時も早くこの地を離れたいと言う気持ちと裏腹に、まだ復員してこない主人のことを思うと、本当に後ろ髪をひかれる思いでした。

町ぐるみで避難した私たちの落ち着き先は、夏休みで空いていた泗川小学校の校舎でした。布団も何もない板の間で綿のように疲れた体を横たえると、すぐに夢路にひきこまれていきました。気が立っていたので何も苦にはなりません。主人が帰ってこないのので、両親と一緒に何日暮らしたでしょうか。その間には本当にささいなことで、みにくい他人の親子げんかを何度も見ました。今、思うと気持ちが殺ばつとなっていたのだと思います。

河東を引き揚げてくるとき、米屋の米を全部持ってきたので、お米には不自由しませんでした。終戦にな

つたとたんに市場には物があふれ、よくぞこれだけの物資を隠していたのだと感心したものでした。銘々好きなものを買ってきて、三度の食事を作っていました。

何もすることもなく一日も早く帰りたい気持ちでいっぱいでしたが、あまりにも早い暴動で、国としての引揚げの輸送計画も立っていないで、ただあせって見るばかりで手のほどこしようがありません。その間、町の世話役の方があちこち奔走して船を交渉してください、船の都合がついたから、いよいよ明日は出発と言うので、女性が炊き出しをしておにぎりを作って待っていると、計画が水に流れたといつては失望させられることも何度かありました。結局、五百人が一度に引き揚げるということは無謀なことだったので。

月末になって、その避難所にひよっこり待っていた主人が帰ってきたのです。主人のことはあきらめて、両親と共に富山に帰るつもりでいた私は夢かと思いましたが、どうしてここが分かったのかと聞きましたら、晋州の停留所で河東行きのバスを待っていたら、偶然

教え子に会ったのだそうです。「先生、河東には日本人は一人もいないよ。皆、泗川の小学校にいるよ」と教えてくれたそうで、もし、知らずに河東へ行っていたら、どんな目に遭っていたか分からないと思うと、つくづく教職についてよかったと、言っておりました。

しかし、復員してきたのではなく、中隊で功績係をしていた主人は臨月の私の体を心配して、中隊長の私事旅行願いの許可をもらって一時的に帰ってきたので、どうしても隊に戻らなければならぬと言って困りました。隊に戻ればいつ帰ってこられるか分からないので、父が泗川の中隊長の所へ相談に行きましたら、中隊長は、自分が保証人になるからそのまま帰りなさいと言われたそうです。戦争に負けて命令系統も何もなくなっているのに、今更、隊に戻らなくても私の両親も説得して、本人は不本意ながらもようやく納得しましたが、長い間、自分は逃亡兵だという自責の念にかられていたようです。

持っていた短剣は帰る途中、玄界灘で捨てました。

帰隊しないと決まったら、いつ出産するか分からない私をこんな悲惨な所に置いておけないと、泗川におられたお友達の先生にお願いして、知り合いの旅館の一室を借りることになり、両親と水盃で別れました。

母は主人に「あなたにあげた娘だから、この先何が起きようともお任せします」と言っていました。初めてのお産を抱えた私の前途を思うと、どんなにか心配してくれていたことと思えますが、その母も平成二年（五年前）に亡くなりました。何一つ親孝行しないまま母を見送った私は、本当に不孝者でした。

旅館で帰国の船を待っている間に、一度、河東から青年が一人酒を持って訪ねてきました。主人が青年訓練所で軍事教練の指導をしていました。通ってきた青年で、別れにきたと言っていました。でも時が時だけに、若しやという気持ちがあつたのでしょうか。主人が疑うわけではないけれど、「お前から飲め」と言つて器に注ぎましたら、彼は、ぐつとあけました。ほんの一瞬にせよ、この青年を疑つたことを後悔しました。ある河東で言葉たくみに両親たちをだまして軟禁

した先生とは、えらい違いだと思いました。それから、さしつさされつ打ち解けて胸襟を開いて、夜遅くまで思い出を語り合っていました。

その後、団体で日本へ引き揚げることは無理との結論が出て、お金を持っていく人から順次、少しずつまとまって闇船を買い、引き揚げられました。結局、お金のない私の両親のような教員仲間が、最後に取り残され、一応釜山に出て、国の引揚げの輸送計画に沿つて帰ってきたのです。乗船を待っている母たちの目の前で、一便早く出航した引揚船が魚雷にふれて爆破したということも話していました。

当時の海の中には、不発の魚雷がたくさん沈んでいて、目に見えないだけに不気味だつたと思います。また、親しくしていた校長先生の御一家が、終戦後、すぐ一家皆殺しになり、釜山中学の寄宿舎におられた長男だけが助かつたそうです。三つも四つも遺骨を持つて乗船を待つておられ、母は気の毒で声がかげられなかつたと言つておりましたが、いろいろな悲惨な地獄を見てきました。

私たちは九月十三日まで泗川におりましたが、十四日に軍隊が撤退することになり、安全は保証できないということ、お友達のお父様の農場で小作人として働いていた朝鮮人の世話で、沖うたせを一隻借りることになりました。「沖うたせ」というのは帆だけで走る漁船で、玄界灘を渡るには無謀に近い冒険だったのです。七家族二十七人が乗り込むことになり、三千浦港から出航するので牛車にゆられて港へ行きました。

新栄丸と言う木造帆船で、船頭はもちろん朝鮮人です。老人、女、子供と、男は主人と主人のお友達の二人だけで、万一に備えて日本刀を敷布に包んでかくし持って乗りました。台風シーズンで二、三日前に通った台風の影響で、木の葉のようにゆれるという表現がぴったりの状況でした。でもこれに乗ればともかくにも内地へ帰れるという安堵感でいっぱいでした。皆、船倉に入れられましたが、私だけは主人と二人は生簀（海水を入れて魚を生かして置く所）を借りて、むしろ一枚敷いた中で寝ました。今、考えるとよくまああんな所だと思いますが、そのときは必死で冷静な

気持ちでいました。

船に乗って落ち着くのを待つていたかのように陣痛が始まったのです。初めてのことであり、もちろん、医者も産婆もおられるわけでなし、心細かったあの時のことを思うと胸が熱くなります。主人だけが頼りでもし万が一死んだら海に流してと頼んでいました。生簀の底のむしろに寝ていると、玄界灘の大波が頭の上においかぶさってくるような錯覚におそわれる中で、初めてのお産の陣痛に耐えていた私でした。

やがて、十五日の朝を迎えました。昨日からの陣痛にもかかわらず、一向に産まれる気配はなく、だんだんあせりがつのつてきましたが、午後三時過ぎ長い時間をかけてやっと産まれました。出生地、玄界灘の男の子でした。長い時間かかったお産だったので、産まれた子供はまるで「ふくろくじゅ」のような長い頭をしておりました。それでも母子共に元気で命があったことに、改めて何かに感謝せずにはいられません。泣きました。主人もきつと泣いていたと思います。



医者も産婆もいない窮屈な生簀の中で、何の経験もないのに、子供を取り上げる、という大仕事をした主人の気持ちには、さぞ複雑だったと思います。それだけに無事産まれた時の喜びは、一しおだったと思います。独身時代に朝鮮の馬山<sup>マダム</sup>で道立病院の産婦人科の医者と一緒に下宿していて、いろいろと臨床の話聞いていたことが、私のお産の参考になったとは……。 「門前の小僧、習わぬ経を読む」とはこんなことをいうのでしょうか。

船頭が船の中で子供が産まれたのは縁起が良いと言って、名前を付けてくれるというのです。妙にさからって心証悪くして、大勢の皆さんに迷惑がかかるようなことがあってはと思い、付けてもらいました。新榮丸で初めて産まれた子供だから、「新一」ということで、船の中では新一と呼んでいました。船に乗っていた皆さんは喜んでくださいましたが、初めての子が産まれたのに何の祝いもしてやれないことは、本当に情けないことでした。

それに船では水が大切なので産湯もつかわせてやれ

ず、洗面器一杯のお湯をもらって子供の体をふいてやるのが精いっぱいでした。ともすれば、深い眠りに落ちそうになる私のほほをたたいて励ましてくれていた主人は、さすがに疲れたのか死んだように眠っていました。産まれた子供は周りの環境には関係なく乳を求めて泣きますが、避難からの心労と出産の体力消耗で一滴の乳も出ないのです。「一難去つてまた一難」砂糖のひとさじもなく、母とは名ばかりで一滴の乳も出ない乳房をもんで、一緒に泣きたい気持ちでした。でも助けてくれる神様がおられたのです。主人のお友達のお奥さんが二カ月前に出産されたばかりで、お乳があり余るほど出るし、片方で十分足りているからとのことで、早速お願いして飲ませていただき、腹いっぱいになって、すやすや眠る子供を見ると本当に嬉しく、人の情けの有り難さを感じました。でも、夜になると乳を求めて泣く子に、出ない乳房をふくませて抱いて座っていましたが、情けない思いもしました。

揺れる船の中で大方の人が酔ってふらふらになって

おられました、私は辛いにも船酔もせず、元気でいられたのは神様の御加護があつたのでしよう。生簀から首を出して見ると、ちょうど頭が出るだけの深さがあり、どちらを向いても波ばかり、どこへ向かつて船が進んでいるのかさっぱり分かりません。それに風まかせの帆かけ船ですから、風が止むと船も止まってしまうのです。

主人とお友達の二人は甲板の上を走り回り、かいがいしく食事の支度などしていましたが、若めの入ったいり米のおかゆが、とてもおいしかったのを覚えております。船に乗り込む前に、いつ何が起きるか分からないので、お米を煎って持っていたのです。内地に着けば何とかなると、のんきに考えていた私たちでしたが、その考えの甘さに気付くのは、そう遠いことではありませんでした。

一週間かかって、やっと対馬が見えてきました。でも対馬海峡に差しかかって流れが早く、船は立往生してしまい進むことができません。幸い、付近を航行中の大きな船に曳航してもらい、やっと対馬湾内に入

ることができました。港に近づくにつれて民家の塀に布団がたくさん干してあり、濡れて地図を書いたような布団なので、理由を聞いて見ると、台風で対馬に避難しようとした船が難破して、乗っていた方は亡くなったそうで、私たちも同じ運命に遭っていたかもしれないと思うと感無量でした。

対馬について主人が民家からタライとお水をもたらしてきて、遅ればせながらの子供に産湯をつかわせました。

台風の治まるのを待つて対馬を出帆し、一路、山口県の大島に向かいました。朝鮮人の船はここまでの約束だったので。途中、変わったこともなく大島に着いたのは、夜遅くでした。港には近寄れない、沖に停泊したのですが、私たちの船が着いてから、海辺の砂浜にたいまつが幾つも焚かれていました。

翌朝、聞いた話では、私たちの船が海賊船に間違われていたのです。海賊船が沖に停泊しているからと、男が皆浜に出て、たいまつを焚いて夜通し警備していたとのことでした。明るくなって船を横付け、主人と

友達の二人が船から下りて行って、話をし、様子が分かって大笑いとなりました。終戦と同時にあちこちで、いろいろな問題が起きているのだなあと痛感しました。浜へ下りた主人は、大きな鯛を買ってきて刺身にして、乗っていた皆さんに振る舞って祝いのまね事をしました。

瀬戸内海に入って驚いたことに数知れない漁船が、魚雷の被害を受けて傾いたもの、半分沈んだものあり、敗戦国のみじめさをさらけ出していました。ここで朝鮮の船と訣別しました。何はともあれ、何事も起きず無事に、ここまで送ってくれた船頭に感謝し別れました。非常事態となると、皆、疑心暗鬼になっていて、人の心が見えなくなっていたことを恥ずかしいと思いました。帰りは朝鮮人を拾って乗せて行くのだと言っていました。その晩は、漁業組合の一間に泊めてもらいましたが、長らく空き部屋になっていたせいか、「のみ」の大群の襲撃で一晩まんじりともできませんでした。赤ん坊にのみがつくのが心配で、抱いたまま夜明かしました。

初めて見る主人の故郷で、どんな生活が待っているのか見当もつきませんが、今は一刻も早く落ち着きたい気持ちでいっぱいでした。ここでまた、船を調達しなければなりません。漁業組合の方のお世話で魚の運搬船を借りることにになり、運転してくださいる方をお世話してくださいましたが、今度の船は発動機船で、大きなエンジン音で子供は眠らないので、船中では座って抱いていました。ちょうど、瀬戸の島々は緑のじゅうたんを敷きつめたように、どこを見ても青々としていました。朝鮮でさつまいもの栽培を見たこともなかった私には、とても珍しく見えました。やがて、このさつまいものお世話になるとは、そのときの私には思いもよらないことでした。又の再会が果たせるかどうかは分かりませんが、次々と一緒に乗っていた方たちと手を握り合って別れました。最後に残ったのが私たちと友達の先生の二家族でした。秋の日はつるべ落としと言いますが、だんだん暗くなってくると心細く、海風も肌寒く感じられました。子供も最後のお乳をもらって落ち着いていました。いよいよ主人の故郷広島

県が近くなってきましたが、海から見る陸地の様子は全然違って見えるらしく、小学六年で朝鮮に行った主人には、なかなか分からなかったようでした。でも何か胸に感じる所があったのでしょうか。ここだと断言して船を着けてもらった所が、やっぱり故郷の港だったのです。お友達の先生や奥様に心からお礼を申し上げ、再会を約してお別れました。

主人は私と子供を待たせて、一人家に帰って行きました。今のように車があるわけでなし、私を歩かせることができない、トリヤカーを取りに行ったのです。

主人の両親も朝鮮の全羅北道の群山の近くで、農士学校の校長を退職して、そのまま農場の管理をしておりましたが、終戦になったら、いち早く家財道具をまとめて、無傷で引き揚げておりました。ひよっこり帰ってきた主人を見て、どんなにか驚かれたことと思います。家は村の小学校の校長先生に貸してありましたので、すぐ明けてもらい、両親が落ち着いていたのです。近所の方の御厚意でリヤカーを借りてきて、私はそれに乗って初めて主人の実家に帰りました。

両親とも結婚式以来の再会で、お互い無事帰ったことを喜び合いましたが、私たちが何も持たずに帰ってきたことが不満の様子でした。暴動が起きて避難脱出引揚げのいきさつを話しましたが、しょせんはそういう目に遭わないものには理解できなかったようです。針のむしろに座らされているような気持ちで、これから先の両親との生活が思いやられ、帰ってきた安堵感より、胸にのしかかる重圧感にさいなまれました。帰れば何とかなると思っていた安易な考えは、一度に吹き飛んだ感じでした。

帰って一番に直面したのが、食べることでした。朝鮮では配給制でしたが、米の心配などしなかったのがなかったので、たちまち行き詰まりました。両親が少し持つて帰っていたお米と、私たちが大島で買って来たイリコ一袋だけでした。調味料も何もないので、海水を汲んできて醤油の代わりに使ったりもしました。

こちらに残していた農地もマツカーサーの農地法の改正で、小作人に取られたのもありますが、返してもらえるだけもらって、とにかく食料を確保しなければ

らないと固く心に誓う毎日です。

### 【執筆者の横顔】

千鶴子さんは大正十二年十一月生まれ、父親は富山県の小学校教員であつた。

昭和三年に、父親は朝鮮總督府から招かれて富山県から朝鮮の慶尚南道の鎮海小学校に赴任したので、家族も渡鮮する。

千鶴子さんは鎮海で育ち、鎮海高等女学校を卒業し、父親と同じ教員をしていたが、昭和十九年、結婚して姓も藤原千鶴子となつて教員を退職した。

御主人は、河東小学校の教員をしていた昭和二十年六月に、召集令状で応召となつた。ところが二カ月足らずで、八月十五日の重大放送で、夢にも思わぬ日本の敗戦を知り涙を流した。険悪な河東を脱出しようとしたが、臨月の千鶴子さんはトラックは無理だと言うので、指揮していた中隊長の自動車に乗せてもらった。後で聞いた話によると、中隊長の弟が千鶴子さんの弟と友達だったとのことだつた。御主人は、日本敗戦と

ということになつて生まれて初めての百姓に取り組んだのです。帰つた時期がちやうど、お米の収穫時でない人に粃を門前にまかれて、あらぬ濡れ衣を着せられたこともありました。翌年の麦の収穫をめざして稲の取り入れの後の稲株を月の光で切りながら泣いたこともありました。乳が足りないので子供は下に寝てくれないので、四六時中、ほとんど背中にくくりつけていました。赤ん坊をおんぶしたままの農作業は本当につらいものでした。農機具も牛もいないので、広い田んぼを、ただ、黙々と一鍬一鍬耕し続けました。苦勞して蒔いた麦が実つて、収穫できたときのよろこびは、何とも言えませんでした。

百姓にも慣れてきて主人だけでも、学校へ復職できればと思つて訪ずれた県庁で聞かされた言葉は、「広島県の復職は三十五歳まで」と言われ、時すでに遅く、三十八歳になつていた主人はどうとう復職することもできず、以後、煙草栽培に取りくんだり、いろいろの職業について苦勞しました。こんな悲しい日に遭わなければならぬことを思うと、二度と戦争はしてはな

なつてから、部隊を出て晋州の停留所で河東行きのバスを待っていたら、偶然に教え子から「先生、河東には日本人は一人もいないよ、皆、泗川小学校にいるよ」と教えてくれたので助かった。

九月十三日まで泗川にいたが、朝鮮人の新栄丸の船主に頼んで出航した。出航中、千鶴子さんは陣痛に耐えていたが、九月十五日午後三時過ぎに長い時間をかけて出産した。出生地は玄界灘の男の子である。母子とも元気で命があったことを若い夫婦は泣いて感謝した。山口県の大島に着いたのは夜おそかった。大島からまた船で着いた所が主人の故郷、広島県の港だった。ひよっこり帰ってきた親子三人を迎えた両親は驚きながら大喜びであった。

御主人は落ち着いてから、県庁に教員復職のため訪ねたが、広島県採用では、三十五歳までは復職できるが、当時三十八歳の主人は復職は無理となったため、農業をすることになった。農機具はなし、牛もなし、広い田畑をただ黙々と一畝一畝で耕し続けなければならぬ農作業である。

ただ、老両親との生活が胸にのしかかる重圧を針のむしろに座るような気持ちで耐え忍ぶことのできるのは、千鶴子さんの深い教養と引揚げ時に朝鮮人の方から救っていただいた体験などを、省みる理智性に富んだ性格で吹き飛ばして、安穩と幸せをつかんだ千鶴子さんである。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)